

質疑応答

司会 では、ここから先はフロアの皆さんから手を挙げていただきます。今のやりとりに関連することでも結構ですし、全く関係ないことでも結構です。ご意見を話されるとすごく時間がかかってしまうので、その点はできるだけ勘弁してほしいです（笑）。それでも、ほんのちょっとぜひ披露したいということであればやむを得ないですが、ご質問を中心にして提供していただきたいと思います。

岡田 東京成徳大学の岡田一郎と申します。平井先生と石河先生に1点ずつ質問させていただきたいと思います。

まず平井先生に対する質問ですが、1960年の三池闘争が敗北に終わった理由の一つとして、53年の113日闘争のときには現場の労働者と一緒に闘っていた職員組合が、60年のときには離れていってしまったということが挙げられます。きょうの平井先生のご報告だと大沢労務課長がいろいろ暗躍していたということです。それ以外にも先週の映像展の映画の中で職員の人が出てきて、主婦の人たちが突然押しかけてきて、結局つるし上げに遭ったと。そういう一部の現場の人たちや主婦の方々による職員のつるし上げがあって、それが原因で60年のときに職員労組は離れていったとよく言われるわけですが、そういうことがあったのか。もう一つはそれがどれぐらいの影響を60年の闘争のときに与えたのかということを知りたいと思います。

石河先生に対する質問は、石河先生は最初に向坂先生が三池闘争を社会主義革命の実験のために利用したという、一般に流布されている考えを明確に否定されたわけです。それでは向坂先生は何を目指そうとしていたのかということで、私は石河先生の報告を伺って、向坂先生が目指していたのはいわゆる職場内における民主主義というか、一生懸命働く人が報われる職場を三池につくっていく。それを全国に広める。そういう職場民主主義の徹底といったものを向坂先生は目指していたという結論なのかと、私は受け取ったのですが、そういう私の受け取り方でよろしいのかどうかを伺いたいと思います。

司会 ありがとうございます。いくつかまとめて出させていただいてからお答えいただきます。どうぞ、よろしく申し上げます。

早川 しばらく前まで大原社研におりました早川征一郎です。意見は控えて質問だけということで、平井さんに少しだけ質問します。私は争議の背景という、石炭から石油へのエネルギー転換、いわゆるエネルギー革命論に興味を持っていて、これがかなり大きなトータルな政策論としてあったと思うのです。それが三池で争われて、総資本対総労働になる。

その場合にももちろん有沢答申もスクラップ・アンド・ビルドで、石炭産業はスクラップがあるけれども、ビルドもあるんだと言っていた。しかし、実際にこの闘争が終わった後、政策転換闘争をやって、それがうまくいかなくて石炭産業はつぶれてしまった。そして、石油に替わってしまった。

石油といった場合にはアメリカのメジャー資本の石油であって、中東の石油はまだ及ばなかった。そして第1次オイルショック後、エネルギー政策はいろいろ変わっていきました。

さしあたって質問に限定して、こういったエネルギー革命論について平井さんはどう考えておられるか。それから、三池争議が残したもの、残したのか、あるいは職場闘争でだめだから一転して政策転換闘争になったのかとも思いますが、政策転換闘争の位置づけをどのように考えておられるか。質問です。

織田 専修大学で非常勤をやっています織田和家と申します。ボアソナードタワー14階の展示で非常に印象深かったものに、会社側が出した大牟田市民に向けたチラシで、いかに生産阻害者が我々は困っているかとか、いかに生産阻害者が労働者をけしにかけて、彼らが働いていないかといった資料がありました。こういう攻撃は当時、盛んに行われていたと思うし、また、国鉄闘争の中においても盛んに喧伝されたことです。

三池の労働組合あるいは労働者がこういう当局の宣伝に対して、いかに反撃していたかということです。彼らの言っていることは嘘八百だというのは簡単ですが、会社側の言っていることも、普通の市民ないし普通の労働者に対してはかなり説得力があるのではないかと。それに対して、いかに実際に反撃していたのかということをお教えいただければと思います。

上野 上野建一といいます。一つは平井先生にお伺いしたいのですが、総資本対総労働の対決になったわけですけども、総評を中心とする労働者側のほうはわかるのです。しかし、資本の側、たとえば三井に、ストライキで石炭がストップしているわけですから、それを他の炭鉱が回すというようなことをやったり、いろいろな総資本としての応援態勢をとったのですが、もう少し他の点ではどうだったのでしょうか。たとえば賃金の面とか、あるいは何か他にあったのでしょうか。それから、暴力団を動員したりもしたわけですが、そういうことについてお伺いしたいと思います。

それから、私も当時、『社会主義』の編集部にて、ずっと三池闘争の経過を体験しました。しかし、そのなかで先ほど兵頭さんが言われた「革命にする」とか、そんなことは実際の場では全然問題にならなかったし、それから向坂先生の考え方からいってもあり得ないと思うのです。

奥田さんがもし言ったとすれば、これは私の推測ですが、三池の闘いで日刊紙を出していたわけですね。それから、助手とか助教授とか、そういう人も動員して応援態勢をとろうと、学習会をやったり、いろいろなことをやっていたわけですね。それがいま大事なときに、他もやればやりたいのだけれども、人数が足りないときに行くばかがあるかと、こういうことだったと思うのです。そういう点は、とにかく三池に集中しろという意味のことを他でも言っていますから、私はそう思います。

先ほどの革命の問題もだいたいサンディカリズムについて、一番それはだめだと言ってきたのは山川、向坂、そういう先生方ですから、労働組合を革命に使うなどということは考えていなかった。むしろ、労働者をまともに人間的に扱えという意味での労働運動の強化ですね。そして、それを通じて労働者、働く人たちの社会をつくるという、その点では間違いはないのですが、直接そんなことはないのです、やはりそれには政党を強化しないとだめだ。それが左派社会党の強化、特に左派社会党のときは綱領をつくることに精力を費やされたわけです。

その当時、まさに資本の側は向坂理論、向坂教室が労働組合をつぶす、そして会社もつぶすとい

う宣伝を盛んにやっていたから、そういう意味ではそんなことはなかったし、考えられる状態でもなかったということだけ申し上げておきたいと思います。以上です。

司会 いったんこの4人の方で絞って、また後で他の方にもお聞きすることにします。ここまでのところで石河さんと平井さんと順序を逆にしてお答えできることについて、よろしく願います。

石河 岡田さんからのご質問で、結局、社会主義革命を目指したのであれば何を狙ったのかという。それは今の上野さんが的確におっしゃられたのでそのとおりだと。

別に職場の民主主義だけではないのです。これはよく言っていたんだそうですが、安保闘争を本当に闘うためには労働者が自分に向けられた攻撃に対して正面から闘わない限りは、安保闘争は本当の闘いにならない。これは向坂先生がこの当時、あらゆるところで言っていますが、日本の民主主義を確立するための闘いだということです。そういう意味で視野は非常に広くお考えになっていたと思います。決して職場だけの方向ではない。

生産阻害者攻撃については、いろいろなビラを無数にもちろん出しました。だいたい総評の中に理解させるのが容易ではなかったらしいです。他の労働組合は、少し言い方がきついです、やはり物とりめというか、自分の組合さえよければいい。あるいは自分の職種だけ一定の条件がとればいいという運動のほうが多かったですから、おのれに似せて周りを見てしまうわけです。三池もバンバンやっているのは結局、物が欲しいからだろうというのを、そうではないとわからせるというのは容易なことではないと思います。

ですから、いろいろな宣伝をもちろんやったと思うのですが、宣伝だけではなくて、実際に三池の組合員や家族と、あのころは日本中の労働組合が皆、三池現地に交流に行きました。ですから、膝を交えて交流して、たとえばこの人たちは生産をストップさせるのだ、さぼるような人たちではないということを実感してもらおうのが、一番だったのではないのでしょうか。

だから、来た人たちは感激して帰って、自分のところで、「あんなこと、嘘だぞ」と言ったのではないのでしょうか。あのころはまだ私は中学生でしたから伝聞なのですけれども、そう思います。あとは難しいから平井先生のほうに（笑）。

平井 一番難しそうな早川先生のご質問、政策転換闘争の意味ということですね。三池争議が終わって、その後の炭労にとっての後退局面で政策を転換する。アベック闘争、労使がアベックを組んで国に政策転換を要求する。そういう意味では炭労の政転闘争は評判がよくない。私もアベックだと思います。

しかし、当時の炭労には、あれしかなかったのではないか、追い詰められた運動なのかという。あれが当時のぎりぎりのところの運動だったのかと、そういう印象しかない。むしろ先生の意見を聞かせていただきたい（笑）。

それから、岡田さんでしたか、職員への主婦会のつるし上げが職員組合を会社のほうにという、それも一つだと思います。しかし、末端職制は敵だという、あれは何でしたっけ。「あっち向け闘争」のときもそうですが、割と末端の職員は会社の手先だという意識がだいぶ三池にあったのではないか。

当時の証言者、たとえばもう10年になりますか、RKB毎日放送が大沢さんの日誌を基に取材し

てつくったテレビがありました。そこで当時の職員組合員の書記長か委員長が発言しているのですが、一番つらかったのは繰り込み場だったのでしょうか、主婦会ではなくて、組合員のつるし上げだったと言っています。そのときの映像ですから、そのところだけとらえて焦点を合わせて放映するので、たしかに激しいつるし上げは行われていたと思います。

職員組合が三池労組と三池争議について、一緒に113日のときのように組まなかったというのはそれだけではなくて、いろいろあったと思います。たとえば到達闘争の後に現場の職制の解決権限を全部上部に引き上げた。前はメモ化闘争（協約闘争）といったのですが、職場の職制と分会の間で職場協定を結んで、それを既得権にするという運動があった。末端の職員はそういう当事者の解決能力を全部、上部に吸い上げて解決できない。それがまたつるし上げや職場争議の原因にもなっていた。ですから、大沢さんなどの日誌を見ると、職員組合員に対する工作はすごいですね。その働きかけ、それから、そういう現場での日々の作業での対応について、これでは一緒にやっていけないとなったんだと思います。

職員組合の人に聞き取りをしたことがあるのですが、三池労組についてはその人は一言もよくは言わなかったです。つらかったということしか、私には言いませんでした。

最後の質問ですが、総資本対総労働、総資本の側の応援の内容は他にあったのかという。一つは先ほど言った協調融資を三井鉱山に銀行団がしたということです。それから、私が知っている限りでは財界のインフォーマルな争議対策室のようなものがあって、三池争議のためだけの対策会議、当時の経団連の秘密勉強会みたいなものが資本を問わず、非常に広い範囲のメンバーを集めてやっていた。私の本の中にその研究会の名前を上げてはいるのですが、いま度忘れして思い出せないで申し訳ありません。そういう動きが総資本の側にはあったと思っています。

石河 つるし上げなどはなかったわけではないと思うのです。ですから、先ほど紹介したように向坂先生が、三川支部の職場闘争について、先生は職員組合ともつながりを持って何とか共闘させ



る努力をされたのですが、無用な刺激があるのではないかとおっしゃっているから、そういうことがなかったわけではないと思います。

ただ、私の理解で三池労組全体としては、職制に対して「あっち向け闘争」という。職制が労働者に対していろいろ命令したりするのではなくて、会社のほうに労働者の声を反映したり、あるいは自分たちの要求を吸い上げて、職員組合なら組合らしく会社のほうに顔を向けて、いろいろやるようにという努力をずいぶん粘り強くやったとは思いますが。

もう一つ、一部激しかったのは解雇通告がきたりとか、そういうときは労働者は怒ります。しかも、いま平井先生がおっしゃったように、職制の人たちは解決能力を全部、会社が吸い上げてしまっていますから、ロボットのような立場に置かれています。そういう意味ではかわいそうと言えばかわいそうです。しかし、首を切られて明日から食えない人のほうがもっとかわいそうですから、そういう人たちが怒って、あんなことをやるというのもある意味ではやむを得ないかと思えます。

当時の職場闘争は別に三池だけが激しかったわけではない。時と場合によっては、たとえば今はすっかりおとなしいですが、全電通がパルチザン闘争をやったり、全通が猛烈な職場闘争をやったり、あっちでもこっちでもやっていた。ですから、とりわけ突出した、そういうことがあったかどうかというのは、当時の労働運動でいえば、そんなに特別なものではなかったのではないかという気はします。

司会 他の方にしたほうがいいですね。それではそれ以外で、フロアの方のご質問を受けたいと思います。よろしく願いいたします。

安保 私は安保哲夫といいます。いま帝京平成大学におります。私はかつて向坂逸郎先生の影響を少し受けたことがあって、今の時期に大原社研、それから法政大学がこういう盛大な催しをされて、たいへん感慨深く、敬意を表するものです。そのことについて一つ感想と、若干質問です。

感想というのは、私は個人的には向坂先生が東京、鷲宮でやっておられた資本論研究会に出させていただいたり、端のほうで研究室から若干出て、運動にも少し参加したことがあります。今は実は私にとっては、率直にいうと思い出の世界になっているんです（笑）。

しかし、先ほどからのお話で向坂逸郎と三池闘争というような関係を取り上げていったときに、もちろん石河さんが言うように、それは単なる向坂逸郎と三池闘争と社会主義の関係と見ると、向坂逸郎にとって三池闘争が社会主義のための単なるドン・キホーテ的な闘いとして位置づけられたとか、あるいは今となってはあまり価値がないとは思わないわけです。

しかし他方で向坂逸郎にとって、三池闘争が単なる職場民主主義のための、あるいは60年安保のためだけの闘争であったとも思えない。では、どういう意味があったのか、価値があったのかというのは、私はその後、突き詰めて考えておりませんので、何か言う資格はありません。しかし、この評価は意味がなかったわけではないけれども、その後の歴史まで踏まえてみると、かなり難しい問題、課題になるのではないかと。大げさに言えば、一種、人類史的な課題の一つかもしれないという気がして、私はそれ以上言う資格はないわけです。

より具体的な質問のほうは、輪番制が当時の三池の労働組合にとられていた。私は初めてお聞きして、たいへん面白いと。私はいま実は日本的経営などということを少しやっています、その観点から見ると、日本企業がやるジョブローテーションとどう違うのか、違わないのか。先ほどそう

いうことも出ましたが、私がお聞きしている限りで違うのは、企業がやるジョブローテーションは人の評価にかかわっている。では、組合がやったこの輪番制はただ平等主義的に回しただけなのか。だとすると、それはどういう意味があるか。

企業の場合は多能工性とか何とかという重要な意味があって、やっていることだと思うのですが、そのへんについて専門家として、どういうものであって、どういう評価ができるのかということをお聞きしたいです。以上です。

質問者 大阪から来ました。大阪の釜ヶ崎の日雇い労働者の労働現場で、労働相談や生活相談をずっと30年ぐらいやっています。いま大学で社会人で勉強しています。

石河先生に一つお聞きしたいことがあります。実は先ほどのシンポジウムの前に展示会を見まして、向坂先生が『社会主義』という印刷物に「CO患者に想う」という文を書かれています。私はその文章に非常に感動しまして、ここに全部書き写しました。

人間の生命ほど大事なものはないということで、日雇い労働者、釜ヶ崎でもそうですし、派遣でもそうなのですが、非常に自らの命を酷使して、過労死などの問題もある。労災でいまだどんどん過労死が増えている、自殺が増えているという、そういう背景の中で、この「CO患者に想う」という文章に感激しました。CO闘争について、向坂先生はどのようなこととお話をされていたのかお聞きしたかったので、よろしく願いいたします。

質問者 研究者でもなく、組織の代表でもないの、とりあえず会社員ということで個人的にお聞きしたいと思います。

議論の中で三池の運動をどう生かすかというお話があったのですが、長い目で見ると、私の素人の理解だと、三池闘争が終わって、だんだん大企業中心に民間企業が労使協調になっていく。そういうのが大きな流れだという理解はしているのですが、そのなかでお聞きしたいと思うのは、総評で三池の職場闘争をどう生かしていったか、教訓としてとらえていったのかということです。

それと関連して、平井先生の最後のほうに組織綱領草案というのがあって、その背景も含めてお聞きしたいと思います。以上です。

鈴木 鈴木と申します。きょうのテーマは「三池争議と向坂逸郎」ということで、私は向坂逸郎先生を晩年の5、6年しか存じ上げません。そのときの印象は非常にやさしい好々爺ということですね。先ほど釜ヶ崎の方が「CO患者に想う」ということで、向坂先生の文章が引用されました。私も全く同感です。

三池争議についてはほとんど素人ですので、あまりご質問する資格はないかもしれませんが。しかし、数年前に平井先生のおられる明治大学のリバティタワーで、今回も16日にありましたが、『三池～終わらない炭鉱の物語』という熊谷博子さんの映画が上映されて、私も拝見しました。なかなか見ごたえのある映画だったと思うのですが、少し気になる個所がありました。それは主婦会の会長と称する方が、私にしてみれば非常に激烈なる向坂批判を行っていたのです。

私の記憶に間違いがあれば指摘していただきたいと思いますが、要するに「向坂逸郎なんか学者で机上の空論を吐いているんだ」と。そういう、言うならば誹謗中傷に近いようなお話だったんです。そして、その背後説明はなかったと思います。ですから、あの映画は全体的にはとてもいいと思うのですが、そのへんのいきさつがわからない方が観たら、ある種、向坂逸郎像が歪曲されたも

のになってしまうということで、少し問題だなと感じました。

そこでは触れていませんでしたが、第1組合と第2組合が分裂したときに、たぶん主婦会も分裂していますよね。これについては労働大学でしたか、三池の主婦会についての本が出されていますが、そのへんのいきさつ。それとそもそも主婦会の役割がたいへん大きかったと言われていますが、三池争議における主婦会運動の位置づけといったものはどうなされるのだろうかということです。きょうのテーマにはふさわしくないかもしれませんが、お答えいただける範囲内でお答えいただけたらとてもありがたいと思います。よろしくお願いします。

和氣（文子） いま鈴木さんが『三池～終わらない炭鉱の物語』の中で一番印象に残るところを取り上げられた。主婦会の第1期の副主婦会長ですね。あのころは炭婦協と言っていたそうですが、その第1期の副会長になった方の発言が熊谷さんの映画の中に取り上げられて、それがとても印象的らしくて、あちこちで話題になっています。

というのは、「向坂逸郎は自分が机の上でつくりあげた理論を、自分たち三池でモルモットのよう

に実験した」という発言なんです。ですから、これは強烈で印象に強く残るシーンですよ。それで今までのやりとりのなかでも出てきたように、三池闘争が社会主義革命の発端ではないけれども、そういうものとしてあったのかということが一つここでは問題になっていますでしょうか？向坂先生は社会主義者ですから、そのように結びつけられて語られることはやむを得ないことかもしれません。しかし、先生のお書きになったもの、それから対談などでお話しになったものを読めばおわかりになるように、労働組合運動は労働者の民主主義的な成長を促すものとしてとらえられていると思います。

先生がそうとらえられるというよりも、労働組合運動、それから労働者の闘いはそのように近代的労働者としての民主主義的な経験を積む、そういう場だと思うのです。ですから、職場の中での民主主義の拡大が三池では鋭く出てきたと思います。それが社会に広がっていく。そのことを恐れた資本家と政府がどのように三池を抑えてきたかということが、私たちがとらえておかなければならない三池争議の一つの核心だと思います。

私なども50年前はパルプ工場に働いていて、職場の中で三池を守る会をつくって、三池の現地にも何回か行きました。そういう経験を踏まえてみると、やはり三池の闘いがずっとこの50年間自分の中で繰り返し、自分の生活の経験と重なってきます。そのなかでやはり一つ大事なことは労働者が社会の中で、自分がどういう位置にいて、どういう役割を果たしているかということ、学習を通して知っていったということだと思うのです。

これから、いま失業の多いこの社会の中でそのことを生かしていくというのは一つとても重要な問題だと思います。労働者の民主主義が広がって、そして自分たちのいる位置と、それから社会的に果たしている役割を労働者が自覚していくと、どういう力になるかということ、一番知っている人たちは今まだ労働者ではないのです。それを知っている人は非常に部分的にしかないということですよ。それをひしひしと感じているのは資本家と政府の人たちだろうと思います。

ですから、だんだんと労働者の意識が高まって行って、闘いが鋭く展開されていくようになると、そこでまた穏やかならぬ社会状況が生まれてくるでしょうね。それでそれに耐えられるだけの力をたくわえていかなければいけないという、そのことを多くの人たちに広げていかなければならない

のではないのでしょうか。

私は向坂先生に、「先生がこれまで研究と闘いの中で、経験の中で獲得してこられたものは先生が死んだらどうなっちゃうんですか」と聞いたんです。そうしたら、「時々、それはぼくも考えるな」とおっしゃいました。それで「やっぱり自分の書いた、これまでの本の中に残っていくということだろうか」とおっしゃったのです。

私たちはやはり先生が言っていない、書いていないことを固定観念で作りあげていってはいけないと思います。そういう意味では向坂逸郎が読み直されるべき時期にきていると私は思います。ですから、これを機会に大原社会問題研究所や法政大学出版局などで話し合っただけで向坂逸郎の書いたものを、絶版になっているものも多いですから、少し出版していただいたら、たいへんありがたいなと。

これからそれを読んで、そして自分たちの社会の中で闘っていく役割、そして位置というものを実感していく労働者も生まれてくるのではないだろうか。そして、それは長い長い闘いになると思います。そういう闘いの下支えをしていくという意味で、やはり出版というものは大事だと思いますので、その点もこの機会に申し上げさせていただきます。大事な点を学習する、労働者の政治的な成長、そういう知的な成長というところに一つ目を当てていただきたいと思います。

司会 私が最後に言おうとしていたことを代わりに言っていただいたので、最後に言う必要はないということになりました（笑）。ですから、お二人、平井さんと石河さんにそんなに時間をかけないで答えをいただいて終わりにしたいと思います。よろしく願いいたします。

石河 熊谷さんの映画を私は残念ながら見ていないものでわからない。主婦会の会長さんでそういう言い方をされる方は、おそらく第2組合と言っては失礼ですが、そちらのほうに移られた方ではないかと思えます。

主婦会自体は三池闘争の中で非常に大事な役割ですが、これも「英雄なき113日の闘い」の後につくって、これに対しては会社は猛烈な妨害をして、大きな闘いになったと聞いています。主に塚元敦義さんなどが中心になって、本当に家族ぐるみで生活革命運動をやって、労働者と家族の主体性というものを確立しておかないと、これから闘い続けるのは容易なことではないという、非常に長期展望に立った主婦会づくりです。

ですから、よその労働組合の主婦会、これもまたよその労働組合と一概に言ってはいけないのですが、争議のときに応援団として利用するという位置づけではどうもなかったようです。家族も同じ仲間として、あらゆる面で主体性を持って生きていけるような家族会運動を目指したと聞いておりますから、ずいぶん大きな役割を果たしたのではないかと思います。

それから、向坂先生が主婦会の人から怒られたという（笑）、めったにない例なので、面白いので抜書きの最後に引用しました（座談会「みいけを語る」『労働旬報』67. 4. 5）。第2組合、第1組合と分かれたときに、向坂先生はできるだけ労働者の共闘というものを探らないとだめではないかということ、いつだかわかりませんが、ある日、「主婦会の人に第二組合へいった連中だって労働者だよ。そうけんかばかりしていないで向こうを何とかひきつけるようにしなければいかんじやないか」と言ったそうです。

そうしたら、そのときに主婦会の人たちから怒られた。先ほどの話と全く逆なのですが、先生は

東京に行って座っているから、そういうことになるんだ。現場はそんなものではないとだいぶ怒られて、「僕のほうがあやまった」。向坂先生が謝る姿を私は見たことがないです（笑）。珍しいと思うのですが、とにかく謝った。

ただ、謝ったからといって、自分の考えを間違えだとはここでは言っていないで、「まだ少し早いなと思って」というから、やはりいろいろな経験を通じて理解をしてもらおうという努力もその後、されたのではないのでしょうか。

組織綱領草案について1点だけ。組織綱領草案で主に、例として一番出したのは三池と北陸鉄道です。北陸鉄道も内山光雄さん主導で非常に立派な職場闘争をやられた。ところが北陸鉄道が悪いという意味ではないのですが、ただ、北陸鉄道の職場闘争の企業外への広がり、三池の職場闘争の、国労や全通などへの広がりとの差が少しある。それはやはり労働者政党の存在感の問題でしょう。組織綱領草案自体は総評の文書ですから、そこで直接、労働者の政党に触れる性格のものではないから、一定の限度内の職場闘争の評価だったと理解しています。

残念ながら、三池闘争の後、全体に何となく後退ムードが出たら、組織綱領草案は棚上げになって、組織方針という名前になった。それから職場闘争の位置づけも、「職場闘争」という言葉は総評の文書から消えて、「職場活動」にたしか2、3年たって変わってしまった。ですから、総評全体としては職場闘争の質のようなものが必ずしもきちんと受け止められていたわけでもない。

ただ、繰り返しますが、いろいろなかたちで三池の火はあちこちに伝わったと理解しています。

CO闘争については、向坂先生は反合理化闘争とは生命を守る闘いだ、いつも強調していました。その例として、三井資本が労組を分裂させ、職場闘争を抑えこんだとたんに安全がおろそかにされ、三川大爆発がおきたとくりかえし述べました。CO患者の見舞や大爆発記念日（11月3日）集会にはよくいかれていました。

司会 平井さんから一言よろしくお願ひいたします。

平井 石河さん、ありがとうございました。安保さんから出ました輪番制ですが、ジョブローテーションではありません。輪番制こそ私は労働者の職場秩序と思っています。一言だけということ。

司会 時間がまいりましたので、このへんでシンポジウム「三池争議と向坂逸郎」を終了いたします。貴重なお話をさせていただいた報告者、コメンテーターの方々にお礼を申し上げたいと思います。また、活発に質疑に参加された参加者の方にもお礼を申し上げます。（拍手）